

## チベット仏教における師弟関係

― 師事作法と病の関係をめぐって ―

矢ノ下智也（広島大学）

### 要旨

仏教の実践修行を行う上で、弟子は師を探し求めることが重要である。例えば、初期仏教經典ではブッダはあらゆる生き物の最上者、あるいは医者として表現され、弟子（病人）はブッダの教え通りに実践する様子が描かれる。また、大乘仏教では弟子が師事する善知識（*kalyāṇamitra*）の明確な定義がなされる。『大乘莊嚴經論』（*Mahāvānasūtrāṃkāra*）では、善知識というのは十種の特質をそなえた人物であり、弟子はそのような善知識に師事し、彼の教え通りに修行することが求められる。さらに、仏教タントラ文献では、弟子は自身の阿闍梨をブッダに等しい存在として敬意を払い師事する考えが顕著になる。この考えによれば、阿闍梨に対する供養は、三世一切諸仏に対する供養よりもはるかに大きな功德が弟子にもたらされる。以上のことを踏まえると、ブッダと弟子の主従関係、善知識や阿闍梨の絶対性がうかがえる。

この仏教タントラ文献で説かれる考えは、「グル・ヨーガ」の理論としてチベットでも知られ、カダム文献やその後のゲルク派文献の中では、その理論を前提とした師事作法が説かれる。カダム派のポトワ・リンチェンセー（*Po to ba rin chen gsal*: 1031–1105）の口伝集『青小冊』（*Be'u bum sngon po*）では、弟子はラマに対して「ブッダである」という思いを起こした上で、ラマの長所だけを観察し、教えを享受することが師事作法の根幹であると説かれる。この考え方は、ゲルク派のツォンカパ・ロサンタクパ（*Tsong kha pa blo bzang grags pa*: 1357–1419）にも継承され、『道次第大論』（*Lam rim chen mo*）でも師事作法が論じられる。ツォンカパによれば、弟子はラマを医者、自分を病人であるという心構えを持つ必要がある。さらに、弟子はラマに対してブッダであるという思いを起こした上で、自身の全財産や命までも捧げ、ラマの教え通りに実践しなければならない。ただし、ラマが誤ったことを要求した場合には、弟子はそれに従わず異議を唱える必要がある。ツォンカパの見解は、ラマへの絶対的な信仰を起こしながらも、弟子にもある程度批判的な視点を持つ必要性を示していると考えられる。ポトワやツォンカパによれば、上記のような師事作法を弟子が正しく実行しなければ、弟子は現世で病（ハンセン病、精神疾患など）が原因で命を落とすことになる。

ポトワやツォンカパの師事作法論では、ラマの絶対性も重要であるが、それ以上に弟子の側から「ラマはブッダである」という思いを起こす意識の変容が重視され、不可欠な要素である。

本発表では、カダム派のポトワやゲルク派のツォンカパが前提とするインド仏教における師事作法を整理した上で、師事作法と病の關係に着目し、チベット仏教における師弟關係の特徴を明らかにする。

〈キーワード〉チベット仏教、グル・ヨーガ、師事作法